9
青美会会報（年1回発行）
SEIBI
●青美会ホームページ●
http://www5.plala.or.jp/seibikai/
または「青美会」で検索

青美会趣意書（抜粋）

青美会は、絵画制作を純粋な芸術活動としてとらえ、制作を通して自己に迫る生涯の活動として考え、展覧会を永続的に開催していける人々で構成される組織である。出品者は、時代を追わず、通俗的表現を目的としない、亜流をつくらない、といった制作態度が希求される。友達仲間感覚を超えた、目的意識をもった出品者で構成される。

■青美会のあゆみ

1995年（平成7年） 青美会創立。
1996年（平成8年） 「第1回・青美展」を稲沢市荻須記念美術館にて開催（以後7回展まで毎年開催）。
2003年（平成15年） 「第8回・青美展」より東桜会館ギャラリーにて開催（以後毎年開催）。
2004年（平成16年） 同人制を運営開始。
2009年（平成21年） 「青美会同人展2009」開催（愛知美術館ギャラリー）。
2010年（平成22年） 会報・第1号を発行(以後毎年発行)
2011年（平成23年） 「青美会同人展2011」開催（愛知美術館ギャラリー）。
2012年（平成24年） 「青美会同人展2012」開催（愛知美術館ギャラリー）。中日新聞共催。
2014年（平成26年） 「青美会同人展2014」開催（愛知美術館ギャラリー）。中日新聞共催。
2015年（平成27年） 「第20回記念展」開催（東桜会館ギャラリー）。青美会・ロゴマーク制定。
2015年（平成27年） 「青美会同人展2015」開催（愛知美術館ギャラリー）。中日新聞共催。
2017年（平成29年） 「青美会同人展2017」開催（愛知美術館ギャラリー）。中日新聞共催。

●テーマ「色彩」 各人の絵に対する想いを語って頂きました。

「私の色」 服部 行成（フリー）

「小景」(P15)

私は展覧会で感心した絵の前ではほとんどいつも心の中で「やっぱり色だなあ」と言っています。
離れた場所から色を眺めながら近寄りやがて見えて来た着想や構図と一体になった色彩を改めて鑑賞します。
このように色彩は、描いた人と鑑賞する者とを結ぶ最初のそして最強の手段だと感じています。
私は他の人の絵の色彩をじっくりと味わい自分の絵でも色を一番大切にしています。
そして高齢になった今は、博多人形の肌の色、塩沢紬絣の白を表わす色、草木染の茶や緑、能装束の底光りする色といった深い落着いた色彩がとても好きになりました。これは日本に生まれ育った長い時間の中で私の中に少しずつ日本の色が蓄積されて遂に一杯になり溢れ始めたからではないかと思っています。
私は自分の描く絵の中に片鱗だけでもこういう色が表現出来たらとやってみるのですが、色を塗り、塗り重ね、失敗して洗ってとり、ますます紙面が汚れて落胆する連続です。
それでも、せめて一枚だけでも「やっぱり色だなあ」と自分でみて言える絵が描けたらと願っています。

「色彩」 宮地 英紀（青い道の会）

「バランス」(F50)

青い道の会の教室で、よくやることがある。無作為に抽出されたテーマを1分以内に葉書大の紙に、感じた何かを絵にする。これを20回程度繰り返した後に、各テーマ毎に絵を同時に見せ合い、比較し感想を言い合う。
面白い事に線や形は別としても、色彩は大体60%位の確率で同じ表現で描かれる。人はテーマつまり対象に対し観念的に色彩を捉えていることがわかる。　でも、全く思いがけない色彩に遭遇した時、新鮮な驚きが湧き上がってくる。これは普段自分でも気付いていない観念が色彩によって呼び起こされた結果かもしれない。
この事は、逆に色彩の表現を物事や観念の従属から解放したいとき、新しい何かが生まれる機会になるのであろう。
難しいことではあるが魅惑的だ。そのチャレンジもいいが、色彩によって対象を観念的に描いていくのも好きだ。
色彩は面白いが、難しく大変苦労する。
いつも思っていることがある。絵画でも音楽を表現している。音楽でも色彩や絵を表現している。文学もしかり。
つまり、芸術は人間の観念、感覚を何等かの手段で具現化していく行為なのだろう。そう考えると、色彩の表現は人間の根源に関わる深い奥の世界に踏み込み、人生を広げる行為で、終わりは無い。

「今、自分にできること」 原田 恭子（洋画研究）

「跳ぶ」(F50)

人が絵を見た時、絵から受ける一番の印象は「形と色」と言われています。
その重要な色、つまり色彩について述べることは色彩の領域が大変広いのでとても難しいと思いました。
「色彩」を辞典で調べると「いろ」「いろどり」とあります。
絵を描く時、どんな色にしようか、どんな色の組み合わせにしようかと誰でも考え、悩んだりすると思います。
どんな色彩にするかは各々が持っている色彩感覚によります。
その色彩感覚を高め、「いい絵」を描くために、今、私ができることは・・・・。
一、優れていると言われる絵をたくさん見て、そこから学ぶこと。
二、色（例えば、色相、色のハーモニー、色のトーン等々）について勉強をすること。
三、絵具の特徴や性質を知り、上手に使うこと。
そして最後に、先生が教えてくださる考え方、見方、技法等について、しっかりと受け止め、実践することだと思っています。

「いろはにほへどちりぬるを」 加藤 瑠美（フリー）

「魚上氷」(F10)

絵を制作する上で色彩は重要な要素ですが、色とは一体何ぞや？　と考えますと・・・・・
「もっと光を」とのたもうたゲーテ曰く、光が物に反射し、人が視る事の出来る波長内であれば色が出現するという何とも三位一体的（光源・物体・視覚）な理りがあるようです。又、実際に肉眼で視る色、つまり固有色は自然なままですが、固有色ではない色彩は描く人の心を映す鏡である如く、心理や行動に影響を見る事が出来ます。
私の場合、全くもって「固有色」の単語には申し訳ない程、好き勝手し放題の色選択でして、色彩学もへったくれもありゃしません（苦笑）。　しかし、自分の作品と対峙し改めて自己の色の傾向に深層をつかれ、ドキリとする場合も有ります。色のもつ様々なエネルギーに畏れを感じながら、助けられながら、虹色の、七色の声ならぬ色彩を目指し模索は続いていく様です。

「いろ色あり」 井上 馨（水彩技法）

「旬菜」(F6)

水彩画を描いて一番心がときめくのは構図を決め素描した画紙に色を塗り始めた時、平面的だった素材がむっくりと立ち上がり次第に一個の生命体の様に息づいて来る感じがする時である。しかし、色づき目覚めた素材を余白、空間を含めよりヴィヴィドに表現するための色使いには何時迄経っても自信が持てない。
パレットの配列を前に立ち往生している。色んな色を自由に使いたいと思いつつもアース系やグレー系に偏り勝ちで、彩度の高い色に塗り重ねて混濁した色面から抜け出せていない。絵具に罪がある訳ではなく私自身のこだわりと勉強不足だと自覚するしかない。　水彩絵具は乾くと思わぬ色変わりしたりして翻弄されっぱなしである。
御機嫌伺いも楽ではない。せめて一色でも透明で水も滴るような色彩を捉えてみたいと思うばかりである。

「色について考える」 吉田 洋子（洋画研究）

「my onion」(F50)

絵を描く時、色の置き始めが一番ワクワクして楽しい瞬間です。それが描き進むにつれて最初感じた「いいな！」が消え、訳のわからないものになり、後は惰性で仕上げるのが常となっています。絵を習うようになった時、固有色を使って色を塗るのが当然と考えていた私にとって、木の緑の中にもそれ以外の色が含まれていることを知って驚いたものです。そして朝・昼・夕と時間の経過とともに全ての物が色を変えていくことにも気がつきました。
光が醸し出す色は多様なのに私の絵における色は単純です。　色について深く考えず好きな色を塗っているだけの私の絵はいつも「ぬり絵」という指摘を受けますが、そこから脱出できず、もがいています。試してみなくては何も変わらないと思うのですが、なかなか足が前に出ません。この原稿を書いた事をきっかけに今までの自分を少しでも変えたいと考えています絵の主題を頭に置きながら、混色によって深味のある「私の色」を創ること、固定観念に捉われない色の選択と組み合わせを目指して、新しいことにチャレンジしたいと思います。

「決め色」 水谷 賢一（青い道の会）

「10」(F40)

ピカソの一時期の絵には、制作時期毎に明確な色彩への傾倒が見られる。
「青の時代」「バラ色の時代」といった代名詞によって区分されることは有名である。制作テーマ(連作)によって色彩の系統を統一させることはテーマの一貫性を保つためには極めて有効な手段である。統一された色彩のバリエーションで描くことは画面を安定させる。色彩固有の意志やイメージを潜在意識に貼り付けるには最適な方法。
平面絵画の要素の中で「色彩」は最も主張する要素だといえる。無限の色の中から唯一の色を選択するのは、とても刺激的で楽しい。それは絵画の醍醐味でもある。実際の絵画制作においては誰しもが「決め色」を持っている。
最初に色彩を置く時、あるいは仕上げの寸前等、進行・完結を促す役割を担う「特定な色」を密かに使用する。
「決め色」が文字通り「決まる（画面に定着する）」と完成度は格段にアップし完了する。
その色は一定ではなく、様々な要因で変化する。

関連 展覧会情報

「長谷川光一　展」 ●同人「長谷川光一」（春陽会会員）の個展です。
2018年3月19日(月) ～ 24日(土)　ギャラリー惣（東京・銀座）

「青い道の会展 2018」 ●出品者ー宮地英紀、水巻久美子、井上美代子、吉田洋子、水谷賢一
2018年5月10日(木) ～ 13日(日)　稲沢市荻須記念美術館・一般展示室Ⅰ

「トモコとクミコ」2人展 ●同人「水巻久美子」の過去から現在までの画業を振り返ります。
2018年5月10日(木) ～ 13日(日)　稲沢市荻須記念美術館・一般展示室Ⅱ

「風景の会～30年の歩み」展 ●主宰「平井誠一」出品。
2018年5月26日(土) ～ 7月16日(月・祝)　古川美術館

「平井誠一　個展」 ●主宰「平井誠一」（春陽会会員）の個展です。
2018年6月27日(水) ～ 7月3日(火)　松坂屋名古屋店（本館８階）美術画廊（第1,2）

風景の会絵画展「瀬戸を描く」 ●主宰「平井誠一」出品。
2018年　8月1日(水) ～ 7日(火)　松坂屋名古屋店（本館８階）美術画廊（第1,2）
2018年　9月4日(火) ～ 16日(日)　豊川桜ケ丘ミュージアム
2018年10月6日(土) ～ 11月25日(日)　瀬戸市美術館

企画展「平井誠一　展」 ●主宰「平井誠一」（春陽会会員）展覧会です。
2018年10月27日(土) ～ 12月9日(日)　田原市博物館

予告

「第24回・青美展」
2019年2月19日(火) ～ 2月24日(日)　東桜会館ギャラリー

★第9号・2018年2月13日発行　編集：青美会事務所